令和５年度

たたら研究会
広島大会

日　時　　令和５年１１月２５日（土）～１１月２６日（日）

場　所　　広島大学東千田キャンパス 未来創生センター

M304 講義室

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　大 会 日 程　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

令和５年１１月２５日（土）

11:00	受　　付　たたら研究会	
13:00	開催挨拶　たたら研究会	古 瀬 清 秀　会 長
13:05	歓迎挨拶　比治山大学現代文化学部	安 間 拓 巳　会 員
13:15	研究発表・質疑応答	
16:30	たたら研究会 令和５年度総会	
17:40	閉　　会	

令和５年１１月２６日（日）

8：10～8：30	広島駅集合　大型バス乗車（広島 I.C.→千代田 I.C.）
9：40	北広島町戸谷籾祖地区の亀石、阿坂地区周辺(地形改変研究の説明)
10：30	坤東中世製鉄遺跡復元展示見学
11：00	小見谷中世製鉄遺跡群見学
12：40	戦国の庭　歴史館・吉川元春館跡見学
14：00	昼　食（「みちづれ」北広島町役場近く）
14：30	出　発
14：50	芸北民俗芸能保存伝承館（予定）
15：20	千代田歴史民俗資料館･古保利薬師（予定）
16：00	千代田 I.C.→広島 I.C.
17：15	広島駅着（解散予定）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

たたら研究会 令和５年度 広島大会

一日目（11 月 25 日〔土〕）研究発表

会　場　広島大学東千田キャンパス 未来創生センター M304 講義室

〒730-0053　広島市中区東千田町 1-1-89

TEL：（082）542-7016（代表）

https://www.hiroshima-u.ac.jp/centers/education_facilities/miraisousei

11：00　受　付

13：00　開催挨拶　たたら研究会　古 瀬 清 秀 会 長

13：10　歓迎挨拶　安 間 拓 巳（比治山大学現代文化学部）

13：15　研究発表 1　中世絵画に描かれた鋸鍛冶 －東北院職人歌合の透き台－
伊 藤　実（元広島県埋蔵文化財調査室）

13：45　研究発表 2　広島県山県郡北広島町上石所在カミショウブ第１号製鉄遺跡の発掘調査
安 間 拓 巳（比治山大学現代文化学部）

14：15　研究発表 3　鉄鋼の視点からみた呉軍港と呉海軍工廠
花 岡 拓 郎（大和ミュージアム（呉市海事歴史科学館））

14：45　研究発表 4　太田川上流域豊平地区における砂鉄採取とその年代
貞 方　昇（山口大学名誉教授）・角 田 徳 幸（雲南市教育委員会）

15：15　休　憩

15：30　研究発表 5　松江藩釜甑方の系譜をひく鋳物業者　－島谷家を主たる事例として－
鳥 谷 智 文(松江工業高等専門学校)

16：00　研究発表 6　北緯 40 度の村の製鉄遺跡
佐々木清文（元岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

16：30　たたら研究会 令和５年度総会

17：00　閉　会

エクスカーション集合場所

エクスカーション（26 日）集合場所　広島駅北口バス停留所・ホテルグランヴィア広島の東隣
㈱カープタクシー　観光課　マイクロバス（082-886-3100）

目　　次

【研究発表 1】
中世絵画に描かれた鋸鍛冶 －東北院職人歌合の透き台－
伊 藤　 実（元広島県埋蔵文化財調査室）－－－ 1 頁

【研究発表 2】
広島県山県郡北広島町上石所在カミショウブ第 1 号製鉄遺跡の発掘調査
安 間 拓 巳（比治山大学現代文化学部）－－－ 3 頁

【研究発表 3】
鉄鋼の視点からみた呉軍港と呉海軍工廠
花 岡 拓 郎（大和ミュージアム（呉市海事歴史科学館））－－－ 5 頁

【研究発表 4】
太田川上流域豊平地区における砂鉄採取とその年代
貞 方　 昇（山口大学名誉教授）・角 田 徳 幸（雲南市教育委員会）－－－ 6 頁

【研究発表 5】
松江藩釜甑方の系譜をひく鋳物業者　－島谷家を主たる事例として－
鳥 谷 智 文（松江工業高等専門学校）－－－ 7 頁

【研究発表 6】
北緯 40 度の村の製鉄遺跡
佐々木清文（元岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）－－－ 9 頁

【研究発表 1】

中世絵画に描かれた鋸鍛冶 －東北院職人歌合の透(す)き台－

元広島県埋蔵文化財調査室　伊　藤　　実

『東北院職人歌合』（以下『歌合』という）は、職人を描いたわが国最古の絵画で数種の写本が知られる。なかでも高松宮家に長く所蔵され、現在国立歴史民俗博物館所蔵の「高松宮家本」は、彩色鮮やかな第一級の作品である。

発表では、鍛冶の場面に描かれた奇妙な道具は、現在でも刀や鋸の製作に用いられる「透(す)き台」[(1)]であることを紹介し、この場面が鋸鍛冶を描いたもので、鍛打されているのは中世に新たに登場する「木葉鋸」であると推定する。また、その製作技法など派生する問題についても言及する。

なお、発表内容は『たたら研究第 60 号』（2022 年 5 月）に掲載したものである。

素材とした『歌合』は、「建保第二の秋のころ東北院の念仏に・・・」で始まる詞書から、建保２年（1214）の秋、東北院の念仏会に参集した職人たちが歌合をしたという架空の設定で創作された歌合絵である。その原祖本は伝存せず、写本として「曼殊院本」（現東京国立博物館蔵）、「高松宮家本」（現国立歴史民俗博物館蔵）、「色紙形貼交屏風」の三点が知られている。写本の年代は、詞書の筆者から「曼殊院本」が正平３年（1348）以前、「貼交屏風」が慶長 14 年（1614）以前とされるが、「高松宮家本」は筆者不明で年代も不詳である。これが忠実に原祖本を写したものとすれば、詞書の建保２年（1214）に近い 13 世紀前半の鍛冶を描写したものとすることもできるが、一般には室町時代末期ごろ（16 世紀後半）の写本とされている。「高松宮家本」は彩色が他の写本に比べて華麗で、伝来の経緯からみても天皇家を中心とする宮廷社会のなかで製作されたとする見方は定説化している。

『歌合』の鍛冶の場面には、箱鞴の前で親方と弟子が鍛打している姿を中央に、右前に炭俵が、左前方には二股に分かれた板材にカスガイ状の金具を打ち付けた道具と木柄のヤスリが描かれている。冒頭の奇妙な道具とは、カスガイ状の金具を打ち付けた板材のことである。これは現在でも刀鍛冶や鋸鍛冶が使う「透き台」で、カスガイ状の金具の下に平板を挿入し、その下に楔材を打ち込んで平板に載せた刀や鋸を固定する器具である。これに刀や鋸などの長尺物を固定し、鏟（セン）や鑢（ヤスリ）で切削する際に主に使われる。この「透き台」の存在から、描かれた作業が刀や鋸など長尺物の鍛冶であることが暗示されている。一方、鉄床の上の製作物は、身が紡錘形に膨らんでいて刀とは思えず、形からは木葉鋸に近い特異な形に描かれている。傍の鑢も鋸歯を研ぐのに欠かせない道具である。以上のことから、『歌合』の鍛冶職人は当時としては珍しい鋸鍛冶を描いたものと推定した。

とはいえ、まだ謎もある。鉄床の上の製作物は、彎曲する鉄棒に紡錘形の鉄板を鍛接しているようにも見え、当時の木葉鋸の製作方法としてこうした方法があったのかどうか、今後の追究・検証が必要だろう。また「透き台」の台木は二股の板材だが、こうした二股材の製材は縦挽鋸（大鋸）を使わなければ不可能だと吉川金次は述べている[(2)]。中世に大陸から伝来する大鋸は、15 世紀以降に一般化するとされていて、日本における大鋸の使用開始時期とも関わる問題もはらんでいる。

註および引用文献

（1）「透き台」の呼び名は、鋸鍛冶の使うこの種の台の名称（竹中大工道具館『宮野鉄之助－玉鋼を鍛えた鋸鍛冶－（企画展展示会図録）』2020 年）に拠ったが、刀鍛冶やその他の鍛冶、地域によって「セン台」「セン床」「居床」など様々な名称で呼ばれている。またカスガイ状の金具は、吉川金次は「鳥居」と呼んでいる（吉川金次『鍛冶道具考－実験考古学ノート』平凡社 1991 年ｐ53～54）。

（2）吉川金次『鍛冶道具考－実験考古学ノート』平凡社 1991 年ｐ54－13～15 行目。

【研究発表 2】

広島県山県郡北広島町上石所在カミショウブ第１号製鉄遺跡の発掘調査

比治山大学現代文化学部　安　間　拓　巳

カミショウブ第１号製鉄遺跡は広島県の北西部（芸北地域）、山県郡北広島町上石に所在する小見谷遺跡群の中の一つである。小見谷遺跡群は国史跡吉川元春館跡の西方約１㎞の所を流れる小見谷川流域に展開しており、立地や遺跡の現地形などから中世のものと推定される製鉄関連遺跡が20ヶ所以上分布している。遺跡群が所在する北広島町の旧豊平町域では中世の製鉄関連遺跡が220ヶ所以上確認されているが、そのうちの約１割が小見谷遺跡群に分布していることになる。

吉川元春館についてはその建設時に関連する文献史料が残されており、その中の記述から「わなみのかち（和浪の鍛冶）」と呼ばれた鍛冶集団の存在をうかがうことができる。そしてその居住地は、現在も「鍛冶屋原」「和浪原」の地名が残る小見谷川の下流域であった可能性が高く、こうした職人たちが小見谷川流域で生産された鉄から製品を製作したのではないかと推定されている。そのため、小見谷遺跡群と中世の製鉄・鍛冶職能集団および領主層（吉川元春館跡）とを関連付けることができる成果が得られるのではないかと考えている。また遺跡群から分水嶺を南方へ越えた中原・西宗地区は厳島文書に見える厳島神社へ鉄年貢を納めた山県郡三角野村にあたる地域と考えられているが、三角野村における鉄生産と小見谷遺跡群が関連するのではないかという見方があり、傾聴すべき意見だと考えている。

カミショウブ第１号製鉄遺跡は志路原川との合流地点から小見谷川を約 1.2km 遡った地点に所在する。小見谷川の東側に位置しているが直接面してはいない。遺跡群の中では最も下流域にあたり、谷筋の入り口付近に位置している。遺跡は西方に伸びる尾根の先端を高さ 1.5m・長さ約 13mにわたって断面Ｌ字状にカットして製鉄作業場となる平坦面をつくり出している。平坦面は南北約 13m、東西は丘陵カット面の下部から 8～9mである。発掘調査前の段階で平坦面上には鞴座状高まりが東西に二ヵ所確認できた。

製鉄炉地下構造は東西の高まりの間の鞍部から検出された。土壁をもつタイプの地下構造で、両側に溝状の小舟状遺構をもつ。地下構造は長さ約５ｍ・土壁を含めた幅は約１～1.5m・土壁間は約 0.3～0.6mである。二本の土壁は平行ではなく、東側土壁の両端部が西側に向けて少し湾曲または屈曲しているため、土壁に挟まれた本床部分は中央付近から端部に向かって狭くなる。本床の両端部には炭層や炭混じりの土層が認められるが、中央付近には確認されていない。本床状遺構の北端は大型の粘土塊で覆っており、南端は小型の炉壁片などを詰めた後に大型の炉壁片で塞いでいた。

小舟状遺構は基本的に焼土や炭粒混じりの土を粘質土で覆う構造になっている。東側の小舟状遺構の高まりより北側では上面に木炭層があり、その上には一部に炉壁が置かれている。西側の小舟状遺構は握り拳大ほどの鉄滓などを上面に置いている。東側の鞴座状高まりは地山を削り出してつくられており、製鉄炉に面する側の下端に炉壁を並べている。西側のものは盛り土により成形している。東側の鞴座状高まりの山側には大型土坑が検出された。

本床状遺構の周辺からは排滓に関わる遺構などが確認された。排滓溝は本床状遺構の両側に見られ

る。埋土の状況からおもな排滓は南側から行われたと推定され、最終作業に伴うと思われる鉄滓塊が検出された。南側排滓溝の南東側からは炭溜り、本床状遺構北端付近の北側からは砂鉄溜りが確認されている。北側排滓溝の北～北東側にも木炭が広がる部分がある。

遺構の年代は放射性炭素年代測定法により 14 世紀と判定されている。そのため本遺跡は吉川元春館ではなく、むしろ三角野村での鉄生産と関連を考える必要があろう。今後も遺跡群の調査を継続し、吉川氏や三角野村での鉄生産との関連を明らかにしていきたい。

【研究発表 3】

鉄鋼の視点からみた呉軍港と呉海軍工廠

大和ミュージアム（呉市海事歴史科学館）　花　岡　拓　郎

【研究発表 4】

太田川上流域豊平地区における砂鉄採取とその年代

山口大学名誉教授　　貞　方　　昇
雲南市教育委員会　　角　田　徳　幸

近世初頭、松江藩は斐伊川、広島藩は太田川での鉄穴流しを禁止する。これは上流域で行われた鉄穴流しで流失した土砂によって、下流域が影響を受けるようになったためである。その後、松江藩は鉄穴流しを再開させたが、広島藩は近世を通じて太田川での鉄穴流しを認めなかった。両藩が近世初頭に鉄穴流しを禁じたのは、中世末には大きな地形改変を伴う規模で砂鉄採取が行われたことを窺わせる。このことは、多くの先学が既に指摘するところである。しかし、地形改変を伴う砂鉄採取、すなわち鉄穴流しがいつから始まったのかについては、具体的な検討はほとんどなかった。

筆者らは、近世初頭以降、鉄穴流しが行われなかった太田川上流域の豊平地区において、赤色立体図の判読を通して、地形改変を伴う砂鉄採取が行われたことを前稿において明らかにした（貞方・千葉・角田・徳安ほか 2021『たたら研究』第 59 号)。この地域は、鎌倉時代には厳島神社の荘園であり、鉄年貢を納めたことで知られている。付近には広島大学考古学研究室が発掘した大矢遺跡・矢栗遺跡・今吉田若林遺跡など数多くの製鉄遺跡が分布しており、中世製鉄が盛んなところであった。地形改変は、その原料となった砂鉄を採取するために行われた可能性が高いことは、論及したとおりである。

豊平地区の地形改変地には、水源から尾根の上に引いた水路を使って導水し掘り崩したことがわかる例のほか、尾根筋を水路なしで掘ったとみられる例などがある。これらは、山腹に引いた水路に向かって斜面を掘り崩す近世鉄穴流しとは異なる掘削法といえ、地形改変が中世にさかのぼることが想定される。

一方、豊平地区には、地形改変後に営まれたとみられる遺跡がある。伴造遺跡では、方形基壇を伴う宝篋印塔などが出土しているが室町時代後半のものとされる。また、下陀才城跡は、単郭の小規模なもので「陣」または「砦」とみられるが、「陣」なら 15 世紀後半～16 世紀前半、「砦」なら 15 世紀前半以前のものが多いという※。これら地形改変地に位置する遺跡は、それ以前に砂鉄採取が行われたことを示している。

また、馬場ケ原 1 号遺跡は、削り残された残丘に接する平坦地に多量の鉄滓が広がっており、地形改変後に製鉄が行われたことが明らかな遺跡である。昨年度、たたら研究会地域活動助成金を受け、採集した鉄滓中の木炭片を年代測定したところ、15 世紀後半から 16 世紀半ばとの結果が得られた。地形改変の時期は、こうした事例からすれば江戸時代以前、遅くとも室町時代にさかのぼるものと考えられる。

豊平地区の地形改変地に営まれた製鉄遺跡の年代測定は、現在も継続的に進めている。今回の発表では、その一端を紹介し、中世における山砂鉄採取の問題について検討してみたい。

※小都　隆氏のご教示による。

【研究発表 5】

松江藩釜甑方の系譜をひく鋳物業者　－島谷家を主たる事例として－

松江工業高等専門学校　　鳥　谷　智　文

１．はじめに

近世期、松江藩の鋳物製造、販売を担った釜甑方は、明治 6 年（1873）1 月 13 日、廃止され、民間に払い下げられている。

釜甑方は、初めに中野善次郎へ売却され、次に島谷理右衛門へと引き継がれ、民間での生産が開始され、鋳鉄会社と称し経営がなされていく。

本報告では、釜甑方の流れをくんでいったと考えられる鋳鉄会社、鋳鉄会社から引き継がれ経営されていく島谷鋳工場（島谷支店）の特徴について、経営的な側面をふまえ概観したい。

２．鋳鉄会社

鋳鉄会社は、出雲国意宇郡新町（現：島根県松江市新町）にあり、明治 8 年（1875）6 月に県から認可され、島谷理右衛門が社長であった。資本金は、同 12 年（1879）頃で、3500 円、同 15 年（1882）で 9550 円となっており、恐らく経営拡大がなされていったものと考えられる。

鋳鉄会社を任された島谷理右衛門は、天保期の「白潟町絵図」（松江歴史館所蔵）にみえる天神町の大店嶋屋理右衛門と同一人物か、その子孫と考えられ、綿打弓弦製造、販売の経営を行っており、明治初期に鋳物製造、販売の経営を兼ねていった。

同 13 年（1880）頃の鋳鉄会社は、206 坪（680.992 ㎡、1 坪＝3.30579 ㎡として計算した。以下面積は同様の数値計算を行っている。）あり、株金 3500 円、入社人員 15 人、工人男性 4 人、所有物件 1600 円、金銀有高 172 円の規模であった。この中で、支出分である入費 2500 円、給料 234 円とあり、製造品物価は 7500 円で入費、人件費より高い金額である。販売額、雑費がどれほどであったか詳細は不明であるが、純益として 550 円が計上されており、ある程度順調な経営を想起させる。

３．島谷鋳工場（島谷支店）

明治 16 年（1883）3 月、鋳鉄会社は、島谷鋳工場と称し、島谷理右衛門個人の工場として継続することとなった。

島谷鋳工場は、図 1 にみえている建物と考えられる。ここでは島谷支店と称され、宍道湖に近い位置に建てられており、鋳物のシンボル、表門、土蔵、鋳造品、土蔵、運送用の馬、船などが描かれている。

大正 11 年（1922）には、敷地が 450 坪（1487.6 ㎡）であり、前述した明治 13 年（1880）頃における鋳鉄会社の敷地と比較して約 2.2 倍となっている。そこに営業所 1 棟、工場 6 棟、倉庫 5 棟、合計 12 棟があった。原材料の仕入先は大阪、販路は島根県、鳥取県、九州であった。

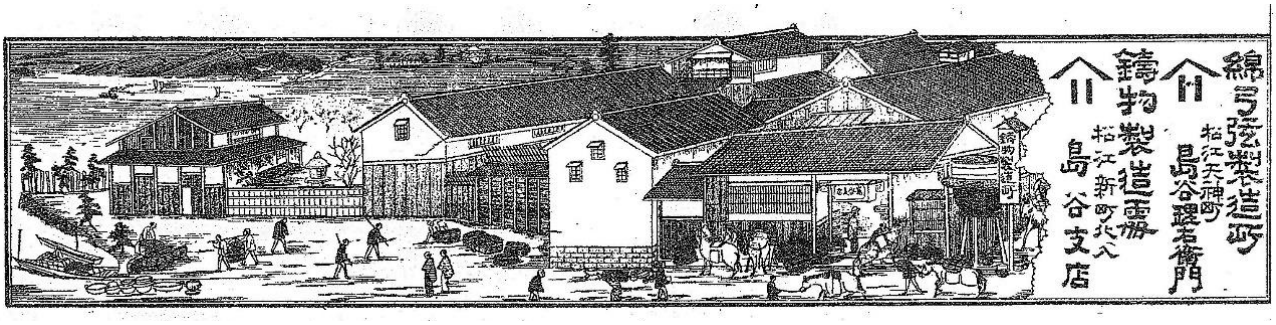


図１　鋳物製造處島谷支店『山陰道商工便覧』明治 20 年（1887）、龍泉堂（だるま堂書店、復刻版、1978 年）

明治 20～30 年代における島谷理右衛門の工場の経営規模については、明治 20 年代中盤で、熔鉄量は 450 貫目、職工 5 人の人力で行い、通常は鍋、釜、火鉢、銅壺を製作していた。明治 31 年（1898）には、職工を 3 人増加し 8 人として、熔鉄量を 1200 貫目まで拡大していった。

島谷鋳工場の経営を差配したのは、鋳鉄会社の社長であった島谷理右衛門の息子理右衛門であり、父の下で「家業精励」し、若く意気盛んな年頃より各地へ奔走し、販路の拡張を図ったとある。鋳物業では、個人の工場経営となった後、明治末期頃まで業務を拡張し、製造について改良を加え、製品を各地に輸送し販路を広げ繁栄しているとされている。

４．おわりに

釜甑方から派生した鋳鉄会社、そして、そこから島谷鋳工場（島谷支店）が継続、発展していったが、その他に、釜甑方、鋳鉄会社の職人であり独立した遠所長太郎、遠所家と親戚となる天野市兵衛、釜甑方で大砲鋳造に関わったとされる村松幸左衛門の鋳物業についても経営規模を指摘し、近代の松江における鋳物業の特徴の一端を示したい。

【研究発表 6】

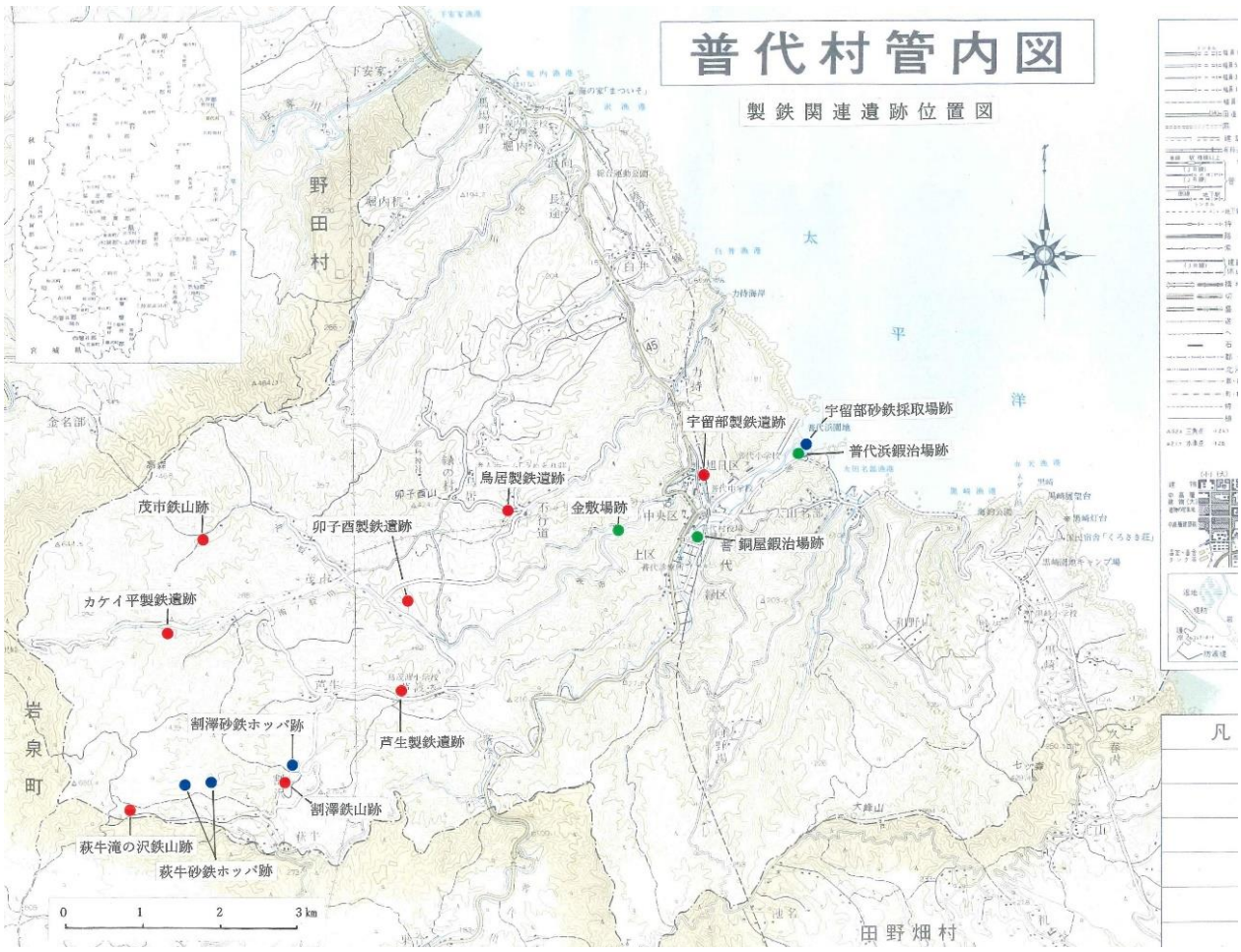
北緯 40 度の村の製鉄遺跡

元岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　　佐 々 木 清 文

江戸時代後期に盛岡藩の製鉄は北上山地の沿岸部で行われていて、中でも下閉伊郡から九戸郡にかけての一帯は重要な製鉄地帯となっていた。本報告で扱う普代村は盛岡藩野田通りにあり、文化・文政期に隆盛した割沢鉄山があった。割沢鉄山の経営や操業に関わる史料は多く残されており、多くは岩手大学に保管されている。鉄山の操業法などを記載した『萬帳』も子孫が保管していて盛岡藩の製鉄法などを伝える貴重な資料となっている。

これらの資料をもとに、多くの研究者が盛岡藩の製鉄を調査・報告し、あるいは市町村史等にまとめられているが、現地には記載のなかった製鉄遺跡や砂鉄採取場なども残されていたので、普代村内に絞ってそれらを補足する形で踏査した結果を報告する。

製鉄遺跡としては、割沢鉄山跡、茂市鉄山跡、萩牛滝の沢鉄山跡、宇留部製鉄遺跡、鳥居製鉄遺跡、芦生製鉄遺跡、銅屋鍛冶場跡、普代浦鍛冶場跡、金敷場跡があり、砂鉄採取地跡は、割沢砂鉄ホッパ跡、



第１図　確認できた遺跡の位置

萩牛砂鉄ホッパ跡、宇留部砂鉄採取場跡がある。

製鉄関連遺物としては各製鉄遺跡の排滓のほかに、普代村ふれあいセンター郷土資料展示室や個人宅の神棚に奉られているものがあった。

また、各遺跡の記録は『九戸地方史』『普代村の古文書』などにも記載があるが鉄山について以下の表に整理した（第１表）。

このように割沢鉄山、萩牛滝の沢鉄山、茂市鉄山は江戸時代から記録に残るが、ほかの製鉄遺跡は記録が確認できなかった。しかし、『九戸地方史』には塩竈や鍋・釜・工具類などの製作用の鉄を作るための村民の要望を認めた野田村大葛鉄山例もあり、茂市鉄山でも宝暦 6 年に百姓が企画して製鉄を行っている。そういう小規模な鉄山は記録が残らなかった可能性がある。

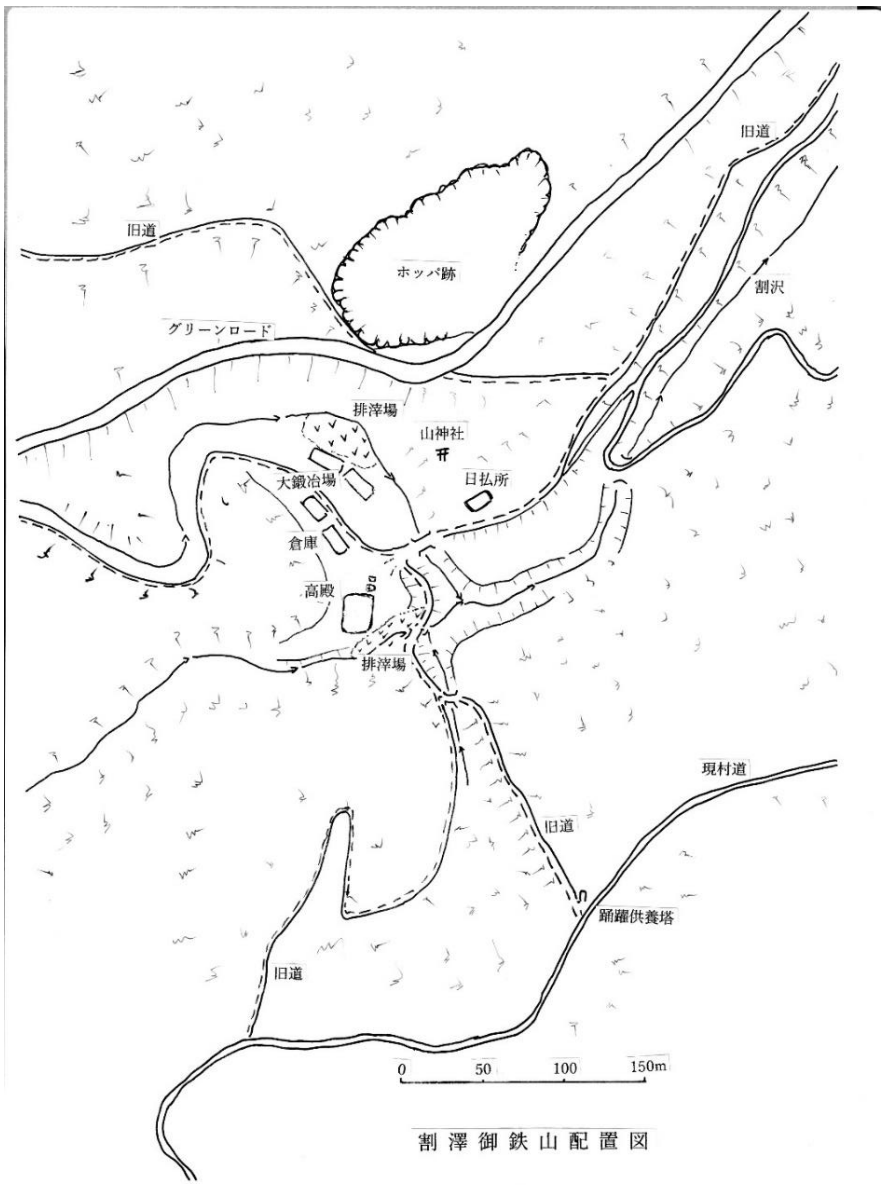
また今回の調査で、普代浦鍛冶場・銅屋場鍛冶屋跡・金敷場では遺物の確認ができなかった。しかし過去には遺物も確認されている。

第１表　普代村鉄山関連年表

年号	西暦	鉄山	記事	出典
享保 2	1717	割沢鉄山	鉄山経営開始、中断あり文化・文政に再び経営	九戸地方史
宝暦 2	1752	萩牛滝沢鉄山	山師肴町六右衛門・穴澤平次良・宮古町権兵衛・岩泉孫助が四カ年経営	同上
宝暦 5	1755	同上	南部藩大飢饉で労働者死に絶える	同上
宝暦 5	1755	茂市鉄山	山師四郎治経営	同上
宝暦 5	1755	萩牛滝沢鉄山	前川善兵衛六合吹きで経営	岩手を作る人々近代編
宝暦 6	1756	茂市鉄山	茂市の百姓が企画して製鉄	仙学隋談
宝暦 12	1762	茂市鉄山	支配人藤原嘉右衛門により新山として開発	南部鉄鉱秘録
明和 7	1770	茂市鉄山	茂市村で経営	九戸地方史
安永 5	1776	茂市三沢鉄山	岩泉四郎治参カ年経営	九戸地方史
安政 7	1860	茂市鉄山	桜庭裕橘が村民の生活経済向上のため再開	普代村郷土史
文久元	1861	茂市鉄山	山舘徳太郎開山	たたらってなあに
慶応 2	1866	茂市鉄山	金策つかず廃山	同上
明治 6	1873	茂市鉄山	菊池長七が経営	普代村郷土史

また、砂鉄採掘地のホッパとしては、割澤鉄山の北側と西側の尾根上に大規模な掘削跡が確認された。明治期に菊池長七が操業した宇留部ホッパ跡は海岸の寄り砂鉄のようである。江戸時代にも普代浦の砂鉄採取の許可願いが出されている。

遺物としては延鉄や鞴をはじめとする製品や道具類が郷土資料展示室に保存展示されているほか、個人宅の神棚に初湯やヤットコ（鉄鋏）が奉られて残されていることがわかった。



第２図　割澤御鉄山配置図

盛岡藩の財政を支えた大規模な鉄山と民需用の小規模な鉄山があったこと、鉄山名は同じでも時期によって場所が異なっていた可能性があることが分かった。また、小規模な鉄山でも岩泉丸石（中村家）の鉄山師が操業にかかわっていた様子がうかがえた。

岩手県で一番小さい自治体ではあるが、このように貴重な遺跡や遺物が残され、村の歴史だけでなく、岩手県の製鉄の歴史を伝える貴重な資料となっている。